様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８１００７

研究課題名（和文）給食・清掃の時間の現象学的解明に基づくいじめ予防教育プログラムの開発

研究課題名（英文）The development of educatinal programm for preventing bullying at school bzsed on the phenomenological explication of cleaning activities and school lunch

研究代表者
生越　達（Ogose, Toru）

茨城大学・教育学研究科・教授

研究者番号：８０２４１７３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、いじめ予防のためには、狭義の道徳教育だけでは効果は得られず、清掃指導や給食指導が重要な意味をもっていることを明らかにした。具体的には、掃除や給食の時間を一人一人の活躍の場であると同時に社会性を育む場であるという両義性の成り立つ場として重視すると同時に、教師がともに加わることで教師の存在の力を示すことが鍵になることが明らかになった。研究成果については、各年の免許更新講習における講義で受講生に示すと同時に、茨城県で出している『茨城教育』で公表した。

研究成果の概要（英文）：　This study clarifies that moral education is not sufficient without the guidannce of dayly life in order to prevent bullying at school and that teahcers' guidance of cleaning activities and of school lunch is importannt. Under the guidance of cleaning activities and of school lunch, individual children can play an active part vigorously and at the same time develop the social nature. At that time, teachers being has a great effect on the development of children's morarity. I made pubulic the reserch result in classes of licence renewal and in " Ibaraki-kyoiku", which reports various of practices.

研究分野：教育方法

キーワード：給食の時間　清掃活動　いじめ予防　教師の存在　社会性　道徳教育

１．研究開始当初の背景

今日ヴァルネラビリティの高い子どもをいじめのターゲットにするような古典的いじめに対して、グループ内いじめや遊び型いじめが増えてきている。その原因は土井も指摘するように（たとえば、土井、2009，キャラ化する／される子どもたち、岩波ブックレット 759）、子どもたちがそもそも異質な他者とのコミュニケーションを閉ざしてしまっていて（圏外化）、その結果異質な他者をいじめるということが少なくなり、その一方で、同質なもの同士であるがゆえの息苦しさを免れるためにいじめを行うことが増えているということである。

先行研究において、上記のような現代型いじめの構造やその原因は明らかにされてきている。また、いじめが生じたときの解決方法やいじめられたことを想定した被害者自身の対応方法も多くの先行研究で提示されてきている。私自身も、いじめの原因となるような子どもたちの集団の在り方を「同調」、「風景化」というキーワードを用いて明らかにした。

しかし、これまでの先行研究は、教室内の子どもたち相互のコミュニケーションの機微を解明しきれてはいない。子どもたちは、現在の教室内コミュニケーションにけっして満足しているわけではない。したがって申請者は、いじめの原因とされるようなコミュニケーションスタイルを抜け出る可能性は子どもたちのなかに残されていると考えている。その際、「給食の時間」や「清掃の時間」に注目したいと考えた。なぜなら、それらの時間は、授業時間のように固く構造化された時間でもなく、また休み時間といった非構造化された時間でもなく、その結果、構造によって同質化され、守られたり、また非構造化のなかで同質なものどうし同調によって乗り切ることもできにくい中途半端な時空だからである。そうした時空で子どもたちがどのようなコミュニケーションをとるのかを観察し、分析することにより、子どもたちの生きる世界を明らかにしたい。あるいはそうした状況における教師の子どもたちへの働きかけの分析をとおして、教室空間を作り出すべく働きかける教師のタクト的な技術を明らかにし、いじめ予防、あるいはいじめ自殺予防の教育に関して重要な意味をもつと思われる開かれたコミュニケーションの可能性について考える。

２．研究の目的

いじめの様態も、子どもたちのコミュニケーションスタイルの変化に従い大きく変わってきている。本研究は、いくつかの学級の給食の時間や清掃の時間の参与観察を行い、いじめの根底にある子どもたちの教室内での存在のあり方や教師の働きかけを現象学的な手法を用いて解明し、その成果をもとに、ここ数年において変化してきているいじめの予防、さらにはいじめ自殺予防のための授業プログラム（道徳の時間、キャリア教育・人権教育等）を開発することを目的とする。さらには、免許更新講習などをとおしてどのような仕方で小中高の教員に伝え、また教職実践演習における演習をとおしてどのように学生に伝えていくか、研修方法について開発する。

具体的には、

（１）「給食の時間」や「清掃時間」といった曖昧な時空の現象学的分析を通して子どもたち同士のコミュニケーションスタイル及び教師のそこへの働きかけの仕方を解明する

（２）コミュニケーションの育ちから生まれるいじめへの対応のプログラムを考える。

といった 2 点を目的に研究をすすめる。

３．研究の方法

本研究では、目的達成のために、以下の三点を実施することが必要である。

（１）給食の時間、清掃の時間の子どもたちの空間経験及び教師の関わりの分析（実態調査研究）

（２）いじめ予防教育、いじめ自殺予防教育の検討と検証（実践研究）

（３）現職教育、学生教育に利用できるいじめ予防教育、いじめ自殺予防教育の検討（教育プログラムの体系化）

具体的には

１）　いくつかの学級を定期的に訪問観察し、給食の時間及び清掃の時間の観察を行う。そしてそこで得られた記録に基いて、また場合によっては教師へのインタビューに基いて、子どもたちの空間経験や教師のタクトを明らかにする。分析は研究代表者が長年方法論として用いてきて現象学的分析方法に基づき行う。とくにコミュニケーションの窓に焦点を当てて分析をすすめる。

２）　給食や清掃にかかわる文献研究を行い、空間経験及び教師のタクトという視点からの再構成を行う。さらに１）の研究と２）の研究を統合し、給食の時間、清掃の時間を子どもたちのコミュニケーションスタイルの点から解明する。

３）　いじめ予防プログラム及びいじめ自殺予防プログラムを作成する。
いじめや自殺にかかわる文献を読み込むことにより、さらにいじめやいじめ自殺に関する研究を深め、その研究と 25 年度に実施した給食の時間及び清掃の時間に関する現象学的研究及び給食や清掃に関する文献研究を結びつけて、いじめ予防教育及びいじめ自殺予防教育の教育プログラムを作成する。

４）　いじめ予防プログラムの学生教育、

現職教員研修用教材化を行う。
研究最終年度には、３年間の研究をまとめて、教師が実践的に活用できるいじめ予防プログラムの教材とし、小中学校等の教師が授業や学級活動・特別活動・道徳の時間・総合的学習の時間などで実践できるように、教員免許更新講習において実際の研修及において実践を行う。

４．研究成果

１）＜学級のなかでいじめが生じる原因の解明＞いじめが学級の人間関係を反映していることを明らかにし、その予防や解決のためには、単にいじめに介入するだけではなく、学級における人間関係を育てていく必要があることが明らかになった。とくに同調と風景化といったことを乗り越えるためには、学級経営という視点が重要であり、その際には、教師の存在が子どもたちに大きな影響を与えることがわかった。教師が権力的である教室では、いじめが起きやすく、教師が共感的であり、かつ、きちんと子どもたちに向き合える教師の学級ではいじめは生じにくい。

２）＜給食指導や清掃指導が重要な意味をもっている点についての研究＞スクールカウンセラーとして子どもたちとかかわってみて、また PISA 調査の結果を見ても、子どもたちの自尊感情が希薄化してきていることがわかる。本研究においては、こうした事態への対応を考えるために、まずはどうしてこのような自尊感情の低下が生じてきているのかを明らかにする必要があった。研究の結果、彼らが自らの存在を①有用性の視点でとらえていることがあり、また②その有用性が、成果として見えるものによってとらえられていることがわかった。

３）＜給食指導や清掃指導のもつ意味＞文献研究や教室の観察、及び教師へのインタビューをとおして、掃除をすることには①他者とのつながりを確認する意味があること、②とくに学校教育における清掃活動には、つながりのある学級をつくるという学級経営的役割があることがわかった。また、給食指導も、①食育の場ということだけではなく、②友達関係を深める役割があることがわかり、また、清掃活動や給食をとおして、自分らしさを育んでいくことが可能であることがわかった。

　より具体的には、給食活動について明らかになったことは、給食指導はしつけ（文化の伝達）という側面を持ちつつも、本来食のもつ社会性、思いやりや分かち合いという視点から活動を捉えることが重要であるということである。食育は、三つのつながり、つまり対象とのつながり、他者とのつながり、自己とのつながりから捉えることが必要である。

　また清掃活動について明らかになったことは、清掃活動は小さなことだが大切な活動であり、清掃活動に対する教師の向き合い方が、子どもたちに与える影響は非常に大きいということである。教師は、真面目に清掃をやる子どもたちを大切な子どもとして学級に位置づけること、掃除を子どもたちが世界を丁寧に捉える機会としてとらえ、彼らの成長の時間として位置づけることが非常に重要な意味を持っている。

４）＜今後の課題＞今後の研究課題は、一般論を超えて、それではどのような給食指導や清掃指導が、より子どもたちの自己形成を支え、さらには人間関係を深めることにより、いじめなどの学級の人間関係から生じる問題を防ぐことになるのかを具体的に明らかにすることである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　16　件）

①　生越達、「生徒指導における学校掃除のもつ意味」、教育実践高度化専攻年報、1巻、3－16、2017、査読なし

②　生越達、「生徒指導における食育のもつ意味－給食指導について考えるー」、教育の現代的課題と教員の資質向上、60－67、2017、査読なし

③　生越達、「ハイデガー「共存在」理解のための序論―人間にとっての「つながり」の重要性―、学ぶと教えるの現象学研究、17 巻、85－99、2017、査読なし

④　生越達、「これからの学校をどのようにつくっていけばよいかー自校の若手教員をどう育てるかー」、茨城教育、852 巻、4－10、2016、査読なし

⑤　生越達、「これからの学校をどのようにつくっていけばよいかー子どもに身に付けさせたい生活の基礎基本―」、茨城教育、851 巻、4－10、2016、査読なし

⑥　生越達、「現代社会と生徒指導における児童生徒理解」、茨城大学教育実践研究、35 巻、327－342、2016、査読なし
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/

⑦　生越達、「こころの教育と教科『道徳』―清掃活動を例としてー」、現代教育の課題と教員の資質向上、60－67、2016、査読なし

⑧　生越達、「教育学部における臨床的養成研修の方法と課題」、学校救急看護研究、9 巻、46－55、2016、査読あり

⑨　生越達、「掲げた自己目標の実現に迫る」、茨城教育、850 巻、4－10、2016、査読なし

⑩　生越達、「学校職員間の連携はできているか」、茨城教育、849 巻、4－10、2016、査読なし

⑪　生越達、「学校の抱える当面の課題をどう改善するか」、茨城教育、848 巻、4－10、2016、査読なし

⑫　生越達、「映画『青い鳥』に関する一考察―情報社会における教師の語りと学級力―」、茨城大学教育学部紀要（教育科学）、63 号、323－340、2014、査読なし
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/

⑬　生越達、「文化的多様性を育む存在としての養護教諭」、学校健康相談研究、10 巻 1 号、2－13、2013、査読有り

〔その他〕

教員向け研修会での成果発表

６．研究組織

(1)研究代表者
生越　達　（OGOSE TORU）
茨城大学・教育学研究科・教授
研究者番号：80241735

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し

(4)研究協力者
無し